

家宣・家継時代の江戸城本丸御殿図再論

深井雅海

はじめに

- 一 東京都立中央図書館特別文庫室蔵「御本丸御表方惣絵図」について
 - 二 茨城県立歴史館蔵「江戸城本丸絵図」について
- おわりに

はじめに

東京都立中央図書館特別文庫室蔵の「御本丸御表方惣絵図」(整理番号六一六―三七)に添付されている改築図は、八代將軍徳川吉宗が、享保元年(一七一六)に、御休息之間や御小座敷を取り壊した図面とされてきた。⁽¹⁾筆者も、「江戸城本丸御殿図」に見る中奥・表向・大奥(上)⁽²⁾(以下、前稿と略す)において、右の説を採用したものの、「女中詰所」などが設けられていることから、その正確な時期は今後の課題とした。

今回改めてこの図面の内容を考察した結果、「御本丸御表方惣絵図」の元図の「奥」部分は六代家宣時代の状況を示し、改築図は七代家継時代の

もの、と推定するに至ったので、この点を考証したい。

また、茨城県立歴史館蔵の「江戸城本丸絵図」(一橋徳川家文書H―1130)の「奥」部分は、「御本丸御表方惣絵図」の改築図とほぼ同内容であり、しかも、この図面は、「表」「奥」「大奥」の本丸御殿の全体が判明する貴重な資料である⁽³⁾ので、その内容について検討したい。

なお、考証の過程で、前稿と重複する部分があることを予めお断りしておきたい。

- 一 東京都立中央図書館特別文庫室蔵「御本丸御表方惣絵図」について

図1は、「御本丸御表方惣絵図」(元図)の「奥」と、「表」のうち「奥」に近い部分を示す。「時斗之間」(図中番号①、以下同じ)と、「黒書院」の裏にある「錠口」(②)が、「奥」への入口にあたる。この図面で時期が特定できる箇所は、二カ所ある。一つは、納戸口の老中・若年寄下部屋(③)であ

る。ここに記された老中(井上河内守・戸田山城守・水野和泉守)、老中格(松平右京大夫、若年寄(大久保長門守・大久保佐渡守・石川近江守)の人名から、享保二年九月〜同七年五月までの御殿図と推定される。

一方、奥向衆下部屋に記された職名や人名からは、別の時期の御殿図となる。すなわち、「桐之間番頭」⁽⁴⁾・「御時斗ノ間組頭」⁽⁵⁾・「御時斗間衆」⁽⁶⁾は、家宣から家継初政にかけて設けられた役職である。また、「伝阿弥・三阿弥」⁽⁷⁾は、同時期の同朋頭である山本伝阿弥・奥山三阿弥と考えられる。両名は、家宣の甲府城主時代の家臣で、幕臣編入後も奥坊主を支配していた。⁽⁶⁾そのため、「奥」に部屋を与えられたものと推測される。

さらに、この図面では、御座之間の庭に能の「御舞台」⁽⁸⁾が設けられていることが注目される。新井白石の「紳書」には、「(前略)猿楽舞台といふ物も御座の間の庭にありし、是は文昭院殿^{○徳川家宣}御代にもありき、今(家継時代)は取捨られし也」と記されているので、この図は家宣時代の御殿図ということになる。

つまり、「御本丸御表方惣絵図」の元図は、「表」の部分は八代吉宗時代初期、「奥」の部分は六代家宣時代の状況を示しているといえよう。⁽⁸⁾

つぎに、家宣時代と推定した元図の「奥」部分(図2)と改築図添付後の「奥」部分(図3)を比較しながら、改築された時期を検証してみよう。

まず、「奥」の改築が、吉宗の將軍家相統後に行われたとする説の根拠を示しておこう。「有徳院殿御実紀付録卷二」⁽⁹⁾には、つぎのように記されている。

〔史料1〕

然るに御みづからは、かの御まし所こぼたれしのち、その側にいさ、かのこりたる廊をしつらひ、そこにおはします事十二年の久しきに

たれり、(中略)享保十二年二月にいたり、はじめて御まし所の新営を仰出され、金銀のかざりをとめ、もはら質素につくられしとぞすなわち、吉宗は將軍家相統後、「御まし所(御座所)」に休息所を壊し、その側に残った「廊」に住み、享保十二年二月に至って、初めて休息所を新築したという。

そして、『東京市史稿』皇城篇第二には、右の「有徳院殿御実紀付録卷二」の史料を掲載したのち、「(参考)」として、「柳當日次記」の享保二年六月二日条の記事を引用している。⁽¹⁰⁾

〔史料2〕

申渡之覚

(小普請方手代組頭・小普請大工棟梁の処罰略す)

御具足奉行

本庄五左衛門

去夏御休息取壊御用勤方不宜支配之者共江勤之所それぞれに不申付、万事罷末二候故、取仕廻之所々不相改候、御場所柄与申、別而心を付可入念之処、無其儀、不埒之仕方候、然上ハ急度可被遂吟味候得共、御時節柄之儀故、兎角の御沙汰無之候、遠慮仕可罷在候

但、五左衛門、小普請方相勤候内之儀付而也

これによると、享保元年夏頃に、本丸御殿の休息所の取り壊しが行われたかにみえる。しかし、小普請方の本庄五左(右)衛門が命じられたのは、本丸ではなく、西丸大奥御殿向の修復御用であった。

国立国会図書館蔵「年録」の享保元年六月四日条をみよう。

〔史料3〕

御右筆部屋溜

小性組

酒井対馬守組

大岡三郎右衛門

御小性組

大岡土佐守組

石河庄九郎

右者西丸大奥御普請御用被 仰付之候旨老中申渡之

御用之義、森川出羽守可相伺旨

(中略)

寄合

間部隠岐守

細川和泉守

竹田源次郎

小普請方

本庄五右衛門

太田伊兵衛

右五人之分、西丸御殿向御修復最前被 仰付之所、御免之旨於森川出

羽守宅一同申渡之

小普請方

国司半兵衛

鳥居金左衛門

右兩人西丸御修復御用可相勤旨申渡之

すなわち、小性の間部隠岐守、小納戸の細川和泉守・竹田源次郎、小普

請方の本庄五右衛門・太田伊兵衛の五名は、正徳六年(享保元年)二月一

日に西丸御殿向御修復御用を命じられたが、將軍家の代替りにより免職と

なり、同年六月四日、改めて、小性組の大岡三郎右衛門・石河庄九郎、小

普請方の国司半兵衛・鳥居金左衛門の四名が任命されたのである。した

がって、「史料2」の本庄に対する申渡しのうち、「御休息取壊御用」とあ

るのは、西丸大奥御殿向の取り壊しのことであった。⁽¹²⁾これは、六代家宣の御台所であった天英院の西丸大奥移徙に伴っての修復と思われる。

このように、通常、御殿の改築が行われる場合は、御用掛が任命される。しかし、幕府の「日記」類には、享保元年に本丸御殿の修復御用を命じた記事がみあたらないので、將軍の休息所の取り壊しは行われなかった可能性が高い。

では、図3の改築はいつ行われたのであろうか。そこで注目されるのは、つぎの国立公文書館蔵「間部日記」の正徳二年(一七二二)一月一五日条の記事である。

〔史料4〕

一 御休息間 御住居替御普請御用被 仰付之

御小納戸

竹田源次郎

同

桜井源右衛門

同

中条加兵衛

右之通、於大溜間越前守申渡之、中務大輔列座

すなわち、正徳二年一月一四日、六代將軍家宣が没し、鍋松(のちの七

代將軍家継)への家督相続が仰せ出された翌日に、將軍の御休息間の住居

替え普請が、側用人間部越前守詮房から、御座之間の大溜間(図2の①)に

おいて、三名の小納戸に命じられた。そのうち、竹田・桜井両名は、間部

と同じ桜田御殿旧臣である。⁽¹⁴⁾実際の工事の指揮にあたったのは、小普請方

である。⁽¹⁵⁾

この住居替えの目的は、数え年四歳で將軍家を相続した家継に対応するためと思われる。したがって、將軍の生活空間を幼児向けに改造する必要

があった。図2（家宣期）と図3（家継期）を比較しながら、その変化をみてみよう。

まず、家宣期の御休息之間と御小座敷（図2の②・③）は、図3の家継期では撤去されている。家継の休息之間となったのは、図3の「東御小座敷御上段」④と思われる。その北側に「御湯殿」⑤が見えるので、この辺が將軍の生活空間であることを示しているといえよう。この「御上段」⑥は、家宣期の図2のほぼ同じ場所にも設けられていた。これは、全く推測の域を出ないが、その東に能の舞台⑦が設置されていることから、將軍が能を鑑賞するための部屋ではなからうか。將軍家宣は、「文昭院殿御実紀付録卷下」に、「元より猿楽を好ませたまふ事の深きを」と記されるごとく、五代將軍綱吉と同じく能が趣味であった。綱吉は、御休息之間的庭に能舞台を設けていたが、家宣は御殿の内へ取り込んだため、別に觀賞用の部屋が必要になったのであろう。この部屋を家継の御休息之間に転用したものである。家継は、正徳二年一月十九日に大奥から「奥」へ移徙している¹⁸。なお、新井白石が指摘したごとく、御座之間的能舞台⑧は、図3の家継期では撤去されている¹⁹。

それ以外の変化をみてみよう。家宣期には「地震間」（図1の⑨）は庭に設置されていたが、家継期には御殿に接続する形となった（図3の⑨）。これも、地震が発生した際、幼児である家継を迅速に避難させる必要があったからであろう。また、能舞台の「拝見之間」（図2の⑩）が「御鈴番所」（図3の⑪）に変わり、新に「女中詰所」（図3の⑫）が設けられた。男性社会の「奥」に、女性の勤務部屋が設置されることは異例である。これも、本来なら大奥で生活する年齢である家継が、將軍家を相続したためにとられた処置といえよう。

すなわち、「御鈴番所」は元々「大奥」にある部屋の一つで、將軍が「奥」へ戻るときに、ここで鈴を鳴らして「奥」にその旨を知らせるという機能をもつ²⁰。こうした部屋が設けられていることは、南の「御座之間」との間に「錠口」が設置され、そこから北側は、女中たちによって管理されていた可能性が高い。家宣期の図2の「大溜り」①や「御三之間」に記載がないにもかかわらず、家継期の図3の「大溜り」⑬に「御近習（小性など）詰所」、「御三之間」に「御側衆詰所」⑭とわざわざ記されていることをみても、男性の側近はここから北側の空間へは入れないことを示唆しているといえよう²¹。能舞台の東にある「女中詰所」は、それを証明するものといえよう。

以上の考証のごとく、「御本丸御表方惣絵図」の「表」は、八代吉宗時代初期の状況を示しているものの、「奥」部分の元図は六代家宣時代、その改築図は、正徳二年一月改築後の七代家継時代の御殿図と推定される。したがって、「有徳院殿御実紀付録卷二」に記される、吉宗將軍家相続後の休息所取り壊しは実際には行われず、吉宗は家継時代の休息所をそのまま受け継ぎ、享保一二年の新築まで、図3の「東御小座敷御上段」④に居住したものと思われる。このことが、「廊」に住んだとの伝承を生んだのであろう。

二 茨城県立歴史館蔵「江戸城本丸絵図」について

東京都立中央図書館蔵の「御本丸御表方惣絵図」に添付された改築図、つまり「奥」部分は家継時代、「表」部分は吉宗時代初期の状況を示す御殿図は、管見の限り、江戸城本丸御殿図の内でも最も流布している絵図の一

つである。徳川林政史研究所蔵の「江戸御城殿中図」(整理番号一〇七七)も、ほぼ同内容の御殿図であるので比較してみよう。図4が改築図添付後の「御本丸御表方惣絵図」、図5が「江戸御城殿中図」である。

「地震間」①、「東御小座敷御上段」②、「御湯殿」③、「御鈴番所」④、「御座之間」⑤の「大溜」に見える「御近習詰所」、「御三之間」に見える「御側衆詰所」、「女中詰所」⑥、「御小性衆部屋」⑦、奥向衆下部屋⑧(図7では「時斗ノ間」)、「御時斗ノ間組頭」(図5では「御時計方組頭」)、「御時斗間衆」、「伝阿弥・三阿弥」部屋の位置関係は図4と図5では同じである。「表」の部分は、「江戸御城殿中図」には、老中・若年寄下部屋に個人名が記されていないものの、その他は両図ともほぼ同内容である。したがって、「江戸御城殿中図」も、「奥」部分は家継時代、「表」部分は吉宗時代初期の状況を示しているといえよう。

注目すべきは、同時期の「表」「奥」「大奥」がそろった本丸御殿図が三点現存していることである。それは、茨城県立歴史館蔵の「江戸城本丸絵図」、木曾古文書館蔵の「江戸御本丸明細図」(『解説 江戸御本丸明細図』(木曾古文書館、一九八三年)、『江戸叢書』巻の一(名著刊行会、一九六四年)所収の「江戸御本丸全図」である。この三点は、「表」「奥」「大奥」ともほぼ同内容の絵図である。後者二点はすでに公刊されているので、改築図添付後の「御本丸御表方惣絵図」と「江戸城本丸絵図」を比較しながら、その内容を検討したい。

図6が「御本丸御表方惣絵図」、図7が「江戸城本丸絵図」の「奥」部分である。

「地震間」①、図7では部屋名の記載なし、「東御小座敷御上段」②、図7では「御上段」、「御湯殿」③、「御鈴番所」④、図7では「御鈴ハン」、「御

座之間」⑤、図7では「御座所」の「大溜」に見える「御近習詰所」、「御三之間」に見える「御側衆詰所」(図7では「御側衆」、「女中詰所」⑥、図7では「御詰サシキ」、「御小性衆部屋」⑦、図7では「御小性部屋」、奥向衆下部屋⑧)に見える「桐之間番頭」(図7では「桐ノ間ハン」)、「御時斗ノ間組頭」(図7では「時斗ノ間」)、「御時斗間衆」(図7では「時斗ノ間役人」)、「伝阿弥・三阿弥」部屋は、名称に若干の相違があるものの、位置関係を含めほぼ同じである。異なっているのは、⑨の「時斗之間次」が「桐ノ間」に変わっているくらいである。したがって、「江戸城本丸絵図」の「奥」部分は、家継時代と推定される。

なお、村井益男・内藤昌両氏は、木曾古文書館蔵「江戸御本丸明細図」の解説⁽²³⁾において、この図は、東京都立中央図書館蔵「御本丸御表方惣絵図」や『江戸叢書』巻の一所収の「江戸御本丸全図」とほぼ同一図であり、前者に添付されている図面は、将軍吉宗による享保一二年の改築図とする。そして同図面や「江戸御本丸全図」・「江戸御本丸明細図」は、中之口にある役人衆下部屋に記された「林大学・同百助」という人名から、享保八年から同一二年の間の江戸城本丸御殿図と推測している。

しかし、第一節で考証したように、「御本丸御表方惣絵図」の「奥」の改築図は、正徳二年の家継期の改築図であり、御休息之間と御小座敷が描かれている元図は、家宣期のものである。一方、「表」の部分は、村井・内藤両氏指摘のごとく、享保前期の状況を示すといえよう。したがって、「江戸城本丸絵図」の「表」の部分は、「御本丸御表方惣絵図」や「江戸御本丸全図」・「江戸御本丸明細図」とほぼ同内容であるので、享保前期の御殿図ということになる。

つぎに、「江戸城本丸絵図」の「大奥」の部分を検討してみよう。「大奥」

には、時期を特定できる人名や職名などは記載されていない。したがって、推測にならざるをえないが、一応「奥」と同じ家継期の状況を示すものとして考察したい。

家継の父六代将軍家宣は、将軍家を相続した宝永六年（一七〇九）、側用人間部詮房に「奥」「大奥」改造の総奉行を命じ、ついで同年四月一日、留守居米津田賢を本丸大奥普請奉行に任命した。そして九月二六日に竣工し、家宣は十一月二日に本丸御殿に移徙している。⁽²⁴⁾新井白石は、『折たく柴の記』のなかで、「此造営の料も金七十余万両をかたぶけ尽し」と述べており、かなり大規模な工事であったことがうかがえる。⁽²⁵⁾「江戸城本丸絵図」の「大奥」部分は、このときの造営後の状況を示すものと思われる。「奥」の部分は図2に該当。

図8は大奥の御殿向と広敷、図9は長局の状況を示す。家宣が本丸御殿へ移徙した十一月二日には、御台所や側室、子供たちも竣工なった大奥へ移動している。「間部日記」⁽²⁶⁾の宝永六年十一月二日条をみよう。

〔史料5〕

一 今日就吉辰、御本丸江御移徙

（中略）

大五郎様 鍋松様被為 入

御道筋、西丸御裏御門より、蓮池通中御門、御玄関前より、御

台所前、御広敷江被為 入

一 御台様 御部屋様 おすすめ様 左京様被為 入

御道筋右同断

一 公方様大奥江被為 入、 御台様 御部屋様 おすすめ様 左京様

御一同二、御吸物・御盃出ル、相済而、 大五郎様 鍋松様之御

部屋江茂被為 入、御熨斗匏御祝被遊

すなわち、御台所（のちの天英院）の他、「御部屋」（二ノ御部屋、のちの法心院）・「おすすめ」（二ノ御部屋）、大五郎の生母、のちの蓮浄院）・「左京」（三ノ御部屋）、鍋松の生母、のちの月光院）の三人の側室、大五郎当時二歳・鍋松（当時一歳）の二人の子供も、大奥へ移っている。⁽²⁷⁾したがって、六人の住まいが大奥にあったことになる。

図8をみよう。①には「大奥御守殿」と記されているので、ここが御台所、のちの天英院の住まいと思われる。立派な庭が描かれており、「御上段」の北には「御寝所」とあるので、ほぼ間違いあるまい。②には「大奥御対面所」とある。将軍と御台所・側室などとの対面所であろうか。

側室や子供たちの部屋については、現在のところ推測の域を出ない。側室の部屋としては、③・④・⑤の辺りが考えられる（ただし、③には「仏間」が見えるので、将軍の御座所の可能性もある）。また、子供の部屋は、⑥・⑦の辺りであろうか。ことに、大五郎が宝永七年八月二三日に没して以降は、鍋松が唯一の男子となったため、⑤が「左京」、⑥が鍋松の住まいである可能性が高い。そして、将軍家宣が正徳二年（一七二二）一〇月に没し、既述したごとく、鍋松が将軍家を相続して「奥」へ移って以降は、⑤が将軍生母月光院の住まいになったものと思われる。⑤は「奥」と廊下で直接繋がっており、可能性は極めて高いといえよう。

ついで、図9により、長局の状況をみよう。長局は、家宣が行った改造により、綱吉期の構造から大きく変化した。すなわち、長局は天守台の東側へ横三列にまとめられ、台所や広敷の南側にも設けられた。⁽²⁸⁾この形状は、基本的に幕末期まで踏襲されている。⁽³⁰⁾長局は、奥女中たちの住まいであり、役職の格式によって住む部屋が決められていた。図9によると、一

の側には年寄①・若年寄②・中居③・表使④・右筆⑤、二の側には御次⑥・切手⑦などの職名がみえる。このうち、年寄・表使・右筆・御次については、月光院付女中のなかに職名が見られるが、その他は不明である。³¹⁾ 今後は、これらの職名が、家継期の女中の役職に該当するか否かの検証が必要であろう。

おわりに

本小稿では、東京都立中央図書館特別文庫室蔵の「御本丸御表方惣絵図」と、茨城県立歴史館蔵の「江戸城本丸絵図」の内容を紹介しながら、主に六代將軍家宣、七代將軍家継時代の江戸城本丸御殿の構造について考察した。

従来、「御本丸御表方惣絵図」は、八代將軍吉宗時代の御殿図であり、添付された改築図は、吉宗が將軍家相続後、華美な休息所を取り壊した図面とされてきた。しかし筆者は、同図面の「奥」部分の元図は家宣時代、改築図は家継時代のものであることを考証した。

將軍の御休息之間や御小座敷がない状態の家継時代の「奥」図は、本丸御殿図のなかでも、最も流布している絵図の一つである。とくに、茨城県立歴史館蔵の「江戸城本丸絵図」、木曾古文書館蔵の「江戸御本丸明細図」、「江戸叢書」巻の一所収の「江戸御本丸全図」三点の「奥」の部分は、「御本丸御表方惣絵図」の改築図とほぼ同内容であり、しかも、この三点の絵図には「大奥」の部分も描かれており、「表」「奥」「大奥」の本丸御殿全体が判明する貴重な資料である。この三点の「表」の部分は吉宗時代前期の状況を示すものの、「奥」の部分は家継時代、「大奥」の部分も同時

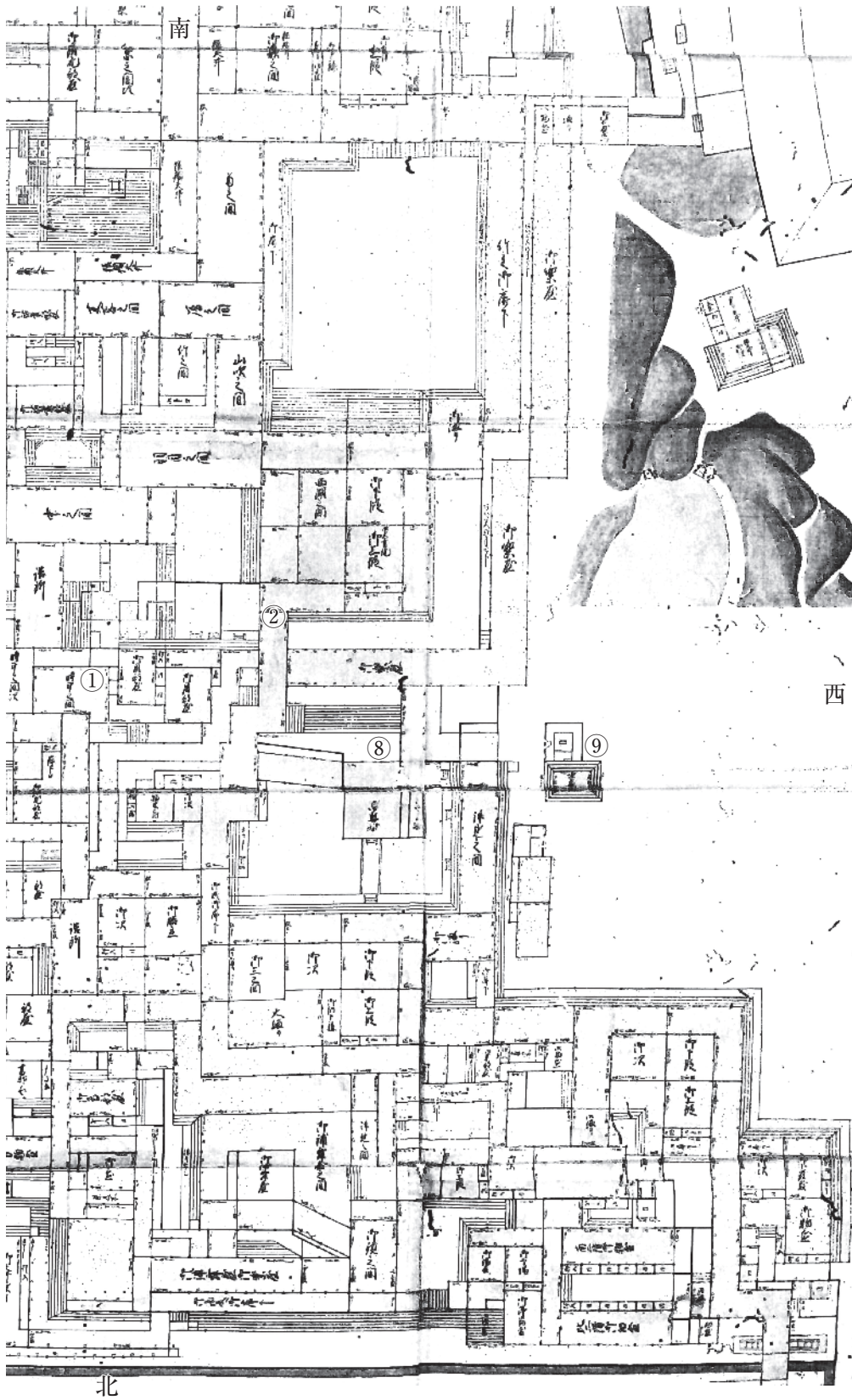
期のものである可能性が高い。

問題は、特異な状況を示す家継時代の本丸御殿図がなぜ流布したのか、という点である。シーボルトが持ち出した「江戸御城内御住居之図」も、ほぼ同内容の御殿図であり、³²⁾ 広く伝播したことがうかがえるが、この問題は今後の課題とする他ない。

註

- (1) 村井益男責任編集『日本名城集成 江戸城』(小学館、一九八六年)の図41の解説(伊東龍一執筆)、三三頁。平井聖監修、伊東龍一著『城郭・侍屋敷古図集成 江戸城I(城郭)』(至文堂、一九九二年)の図33の解説、二六六頁。小粥祐子『江戸城のインテリア』(河出書房新社、二〇一五年)一九頁。
- (2) 『徳川林政史研究所「研究紀要」』二七号所収、一九九三年。
- (3) 管見の限り、「表」「奥」「大奥」の全体像が描かれている図面は、他に、網吉時代の状況を示す「江戸城御本丸御表御中奥御大奥総絵図」(東京都立中央図書館特別文庫室蔵、整理番号六一五—一〇四)があるぐらいである。
- (4) 『古事類苑』官位部三、七六五・七六二—七六四頁。なお、桐之間番の場合、番頭の部屋しか見られないのは、組頭と番衆は將軍側近役からはずれたからと思われる(深井雅海「將軍側近役の範囲について」『日本歴史』五四九号、一九九四年)参照。
- (5) 「元禄八年甲府様御人衆中分限帳」(『甲州文庫史料』六卷(山梨県立図書館、一九七八年)一八〇頁。「甲府殿御分限帳」(『甲斐叢書』七卷(第一書房、一九七四年)二七〇頁。
- (6) 鈴木寿校訂『御家人分限帳』(近藤出版社、一九八四年)三三四頁。
- (7) 『古事類苑』官位部三、七六七頁。
- (8) 「表」部分と「奥」部分の図面の時期が異なる事例は「東武御本丸絵図」でもみられる(深井雅海「江戸城御殿の構造と儀礼の研究」(吉川弘文館、二〇二一年)二七—二八・一〇三・一一〇頁参照)。
- (9) 『徳川実紀』第九篇(吉川弘文館、一九六六年)一四五—一四六頁。

- (10) 『東京市史稿』皇城篇第二(東京市役所、一九二二年)五七八～五八二頁。
- (11) 『東京市史稿』皇城篇第二、五六六頁。
- (12) 本庄五右衛門は、史料により「五左衛門」と記されている場合があるが、『新訂寛政重修諸家譜』(第二二、四〇八頁)には、正徳三年二月二十九日に小普請方、享保元年一月二〇日に具足奉行となり、同「三年(二年の誤りか)六月二日さきのつとめにありしうち、大奥御休息間をこぼたるゝのこゝをうけたまはるのところに、(以下略す)」と記されている。また「史料2」の享保二年六月二日の申渡しに關して、「江戸幕府日記」(国立公文書館蔵、請求番号二五七―一七)では、同日条に「但、五右衛門事、小普請方相勤罷在候内之儀付而(以下略す)」との記述がみられる。
- (13) 『徳川実紀』第七篇(吉川弘文館、一九七六年)二四八～二四九頁。
- (14) 『新訂寛政重修諸家譜』第一三、一三七頁、『同上』第一九、六頁。
- (15) 「有章院殿御実紀卷二」の正徳二年二月五日条(『徳川実紀』第七篇、二八三頁)によれば、休息所の修理により、小納戸三名の他、「小普請方の諸吏等」に褒美の下賜が行われている。
- (16) 『徳川実紀』第七篇、二六八頁。
- (17) 深井雅海「元禄時代の江戸城本丸御殿図再論」(『徳川林政史研究所「研究紀要」五六号、二〇二二年)図1・図2参照。
- (18) 国立公文書館蔵「間部日記」の正徳二年一月一九日条には、「上様、今日従御部屋御表江被遊 御移徙」「八時前於 御座間御規式之御膳七五三出之、畢而御引替之御膳被 召上之、御小性衆髪目半椅勤之」とある。『徳川実紀』第七篇二八一頁も参照。
- (19) 註(7)に同じ。
- (20) 深井雅海「江戸城本丸御殿図に見る中奥・表向・大奥(下)」(『徳川林政史研究所「研究紀要」二九号、一九九五年)八頁。
- (21) 深井雅海「江戸城御殿の構造と儀礼の研究」、一〇二～一〇三頁参照。
- (22) 新築後の「奥」の状況を示すのが、静嘉堂文庫蔵「江戸城奥向絵図」・徳川林政史研究所蔵「東武御本丸絵図」(深井雅海「図解 江戸城をよむ」(原書房、二〇〇三年)一六六～一六九頁)などである。
- (23) 本曾古文書館運営委員会編『解説 江戸御本丸明細図』(本曾古文書館、一九八三年)二一三、八～九頁。
- (24) 『東京市史稿』皇城篇第二、五〇三～五一九頁。註(20)の拙稿五頁参照。
- (25) 新井白石著、松村明校注『折たく柴の記』(岩波文庫、一九九九年)一五二頁。
- (26) 国立公文書館蔵。
- (27) 『徳川諸家系譜』第一(統群書類従完成会、一九七九年)五四～五六頁。
- (28) 『徳川実紀』第七篇、一一三頁。
- (29) 深井雅海「図解 江戸城をよむ」二一八～二二二頁。
- (30) 『同右』口絵3、二四六～二四七頁。ただし、幕末には三棟から四棟となり、東側にも三つの横側が設けられている。
- (31) 松尾美恵子「月光院―踊り子から將軍生母へ」(竹内誠・深井雅海・松尾美恵子・藤田英昭編『論集 大奥人物研究』(東京堂出版、二〇一九年)二七一頁の表2参照。
- (32) 深井雅海「江戸城本丸御殿図に見る中奥・表向・大奥(上)」一〇頁、同論文の註(26)。



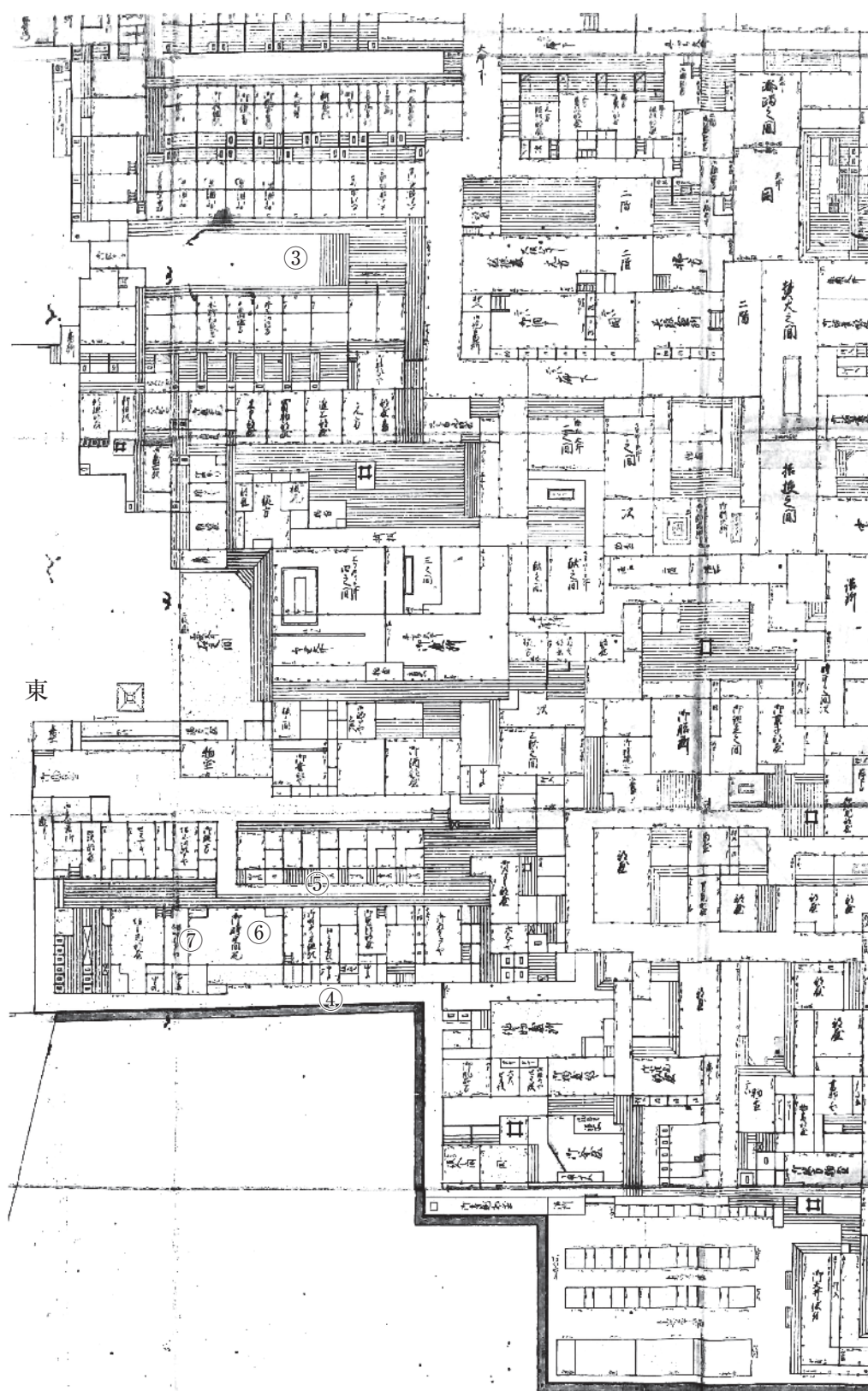


図1 「御本丸御表方惣絵図」

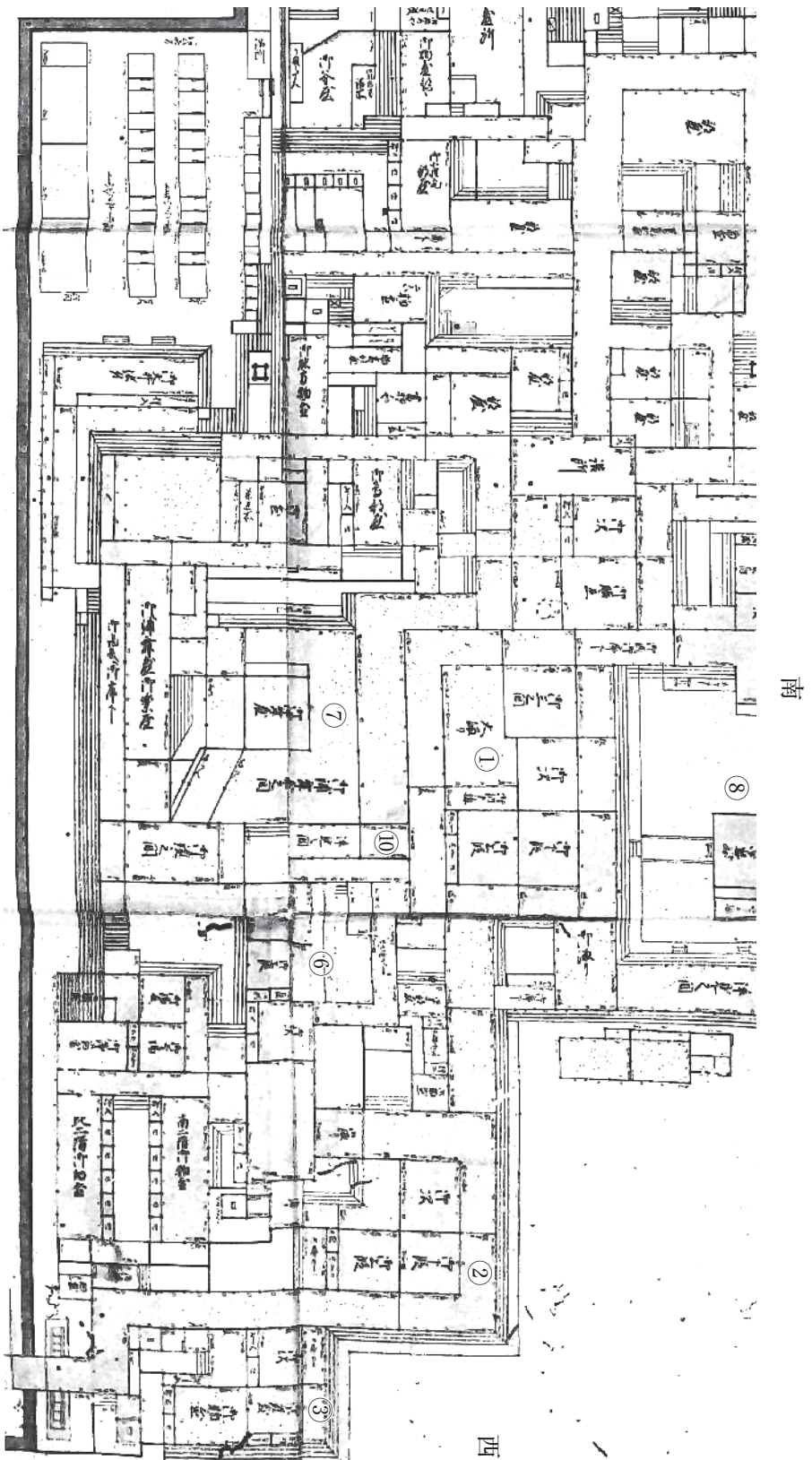
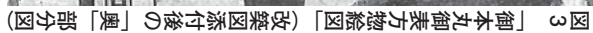


図2 「御本丸御美方惣絵図」(奥一部分図)



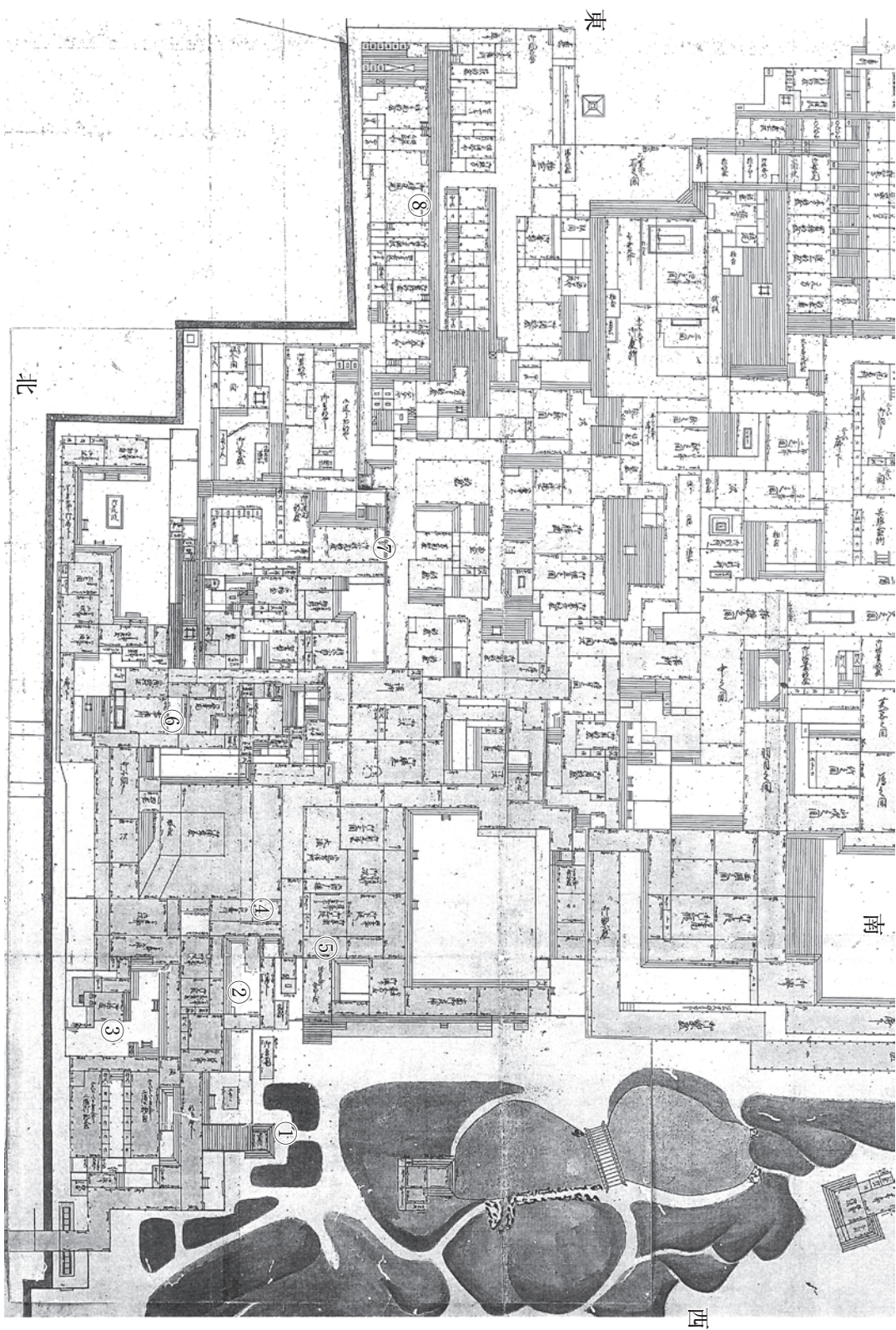


図4 御本丸御殿方惣絵図

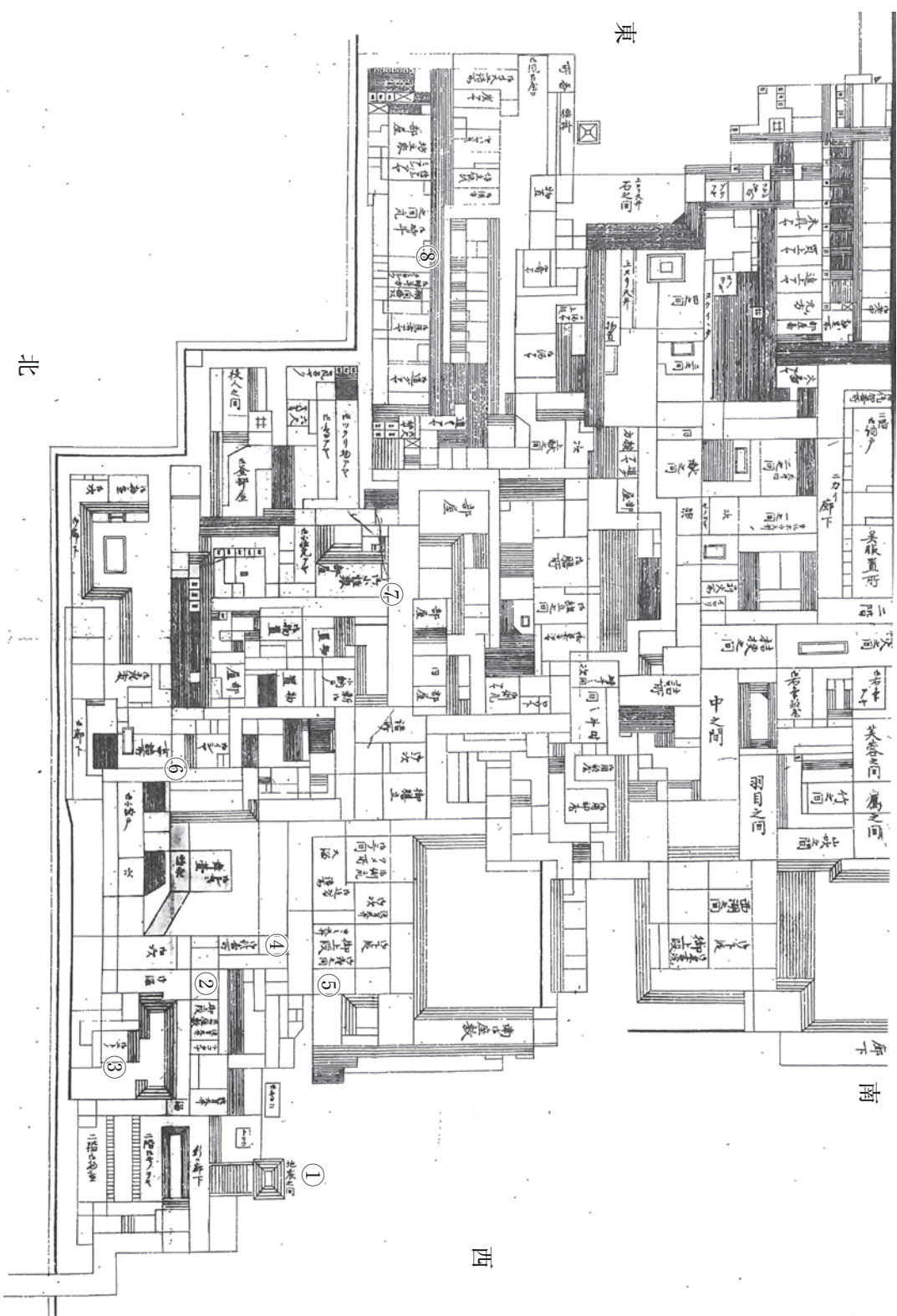


図5 「江戸御城中心図」

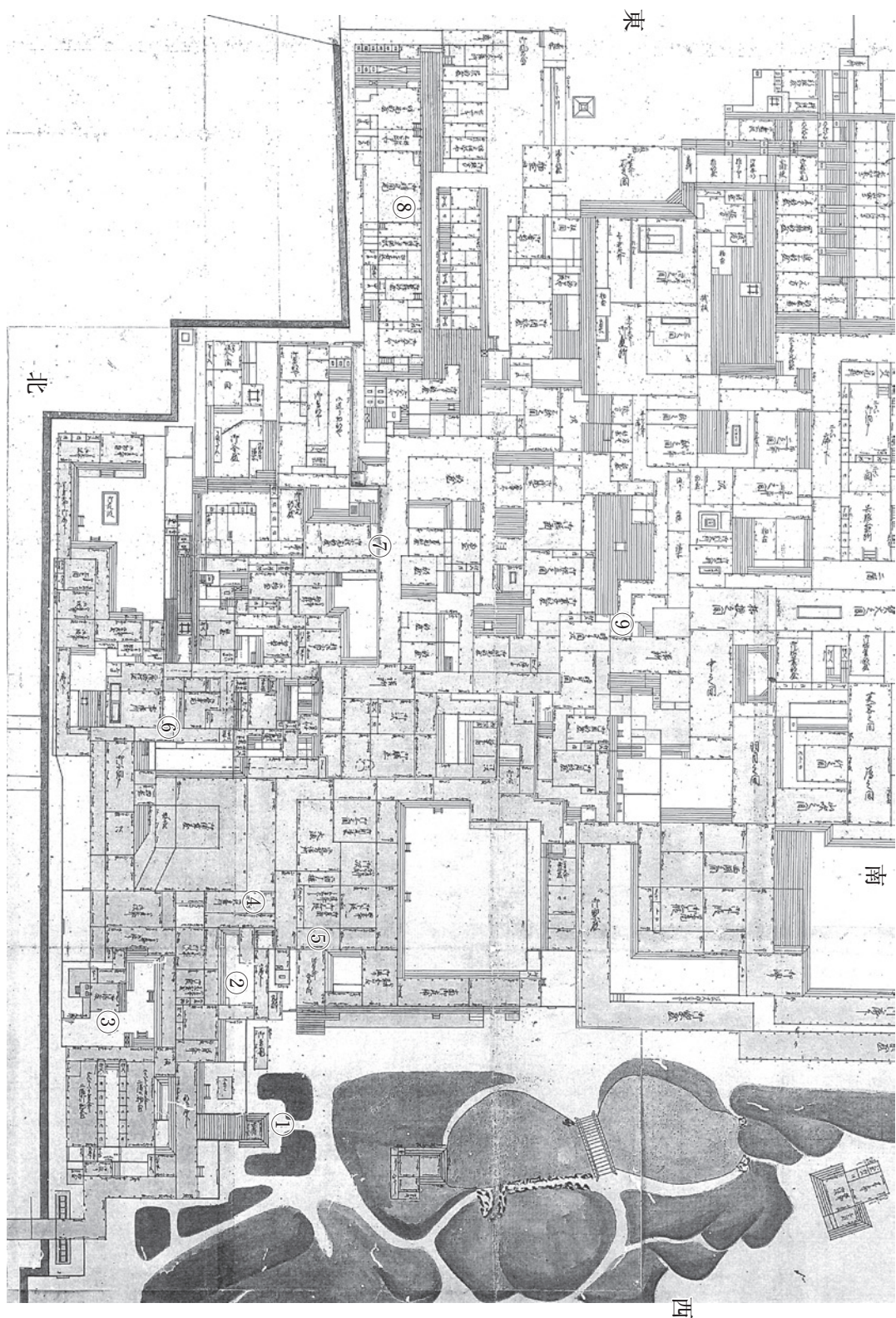


図6 「御本丸御表方惣絵図」の「奥」部分

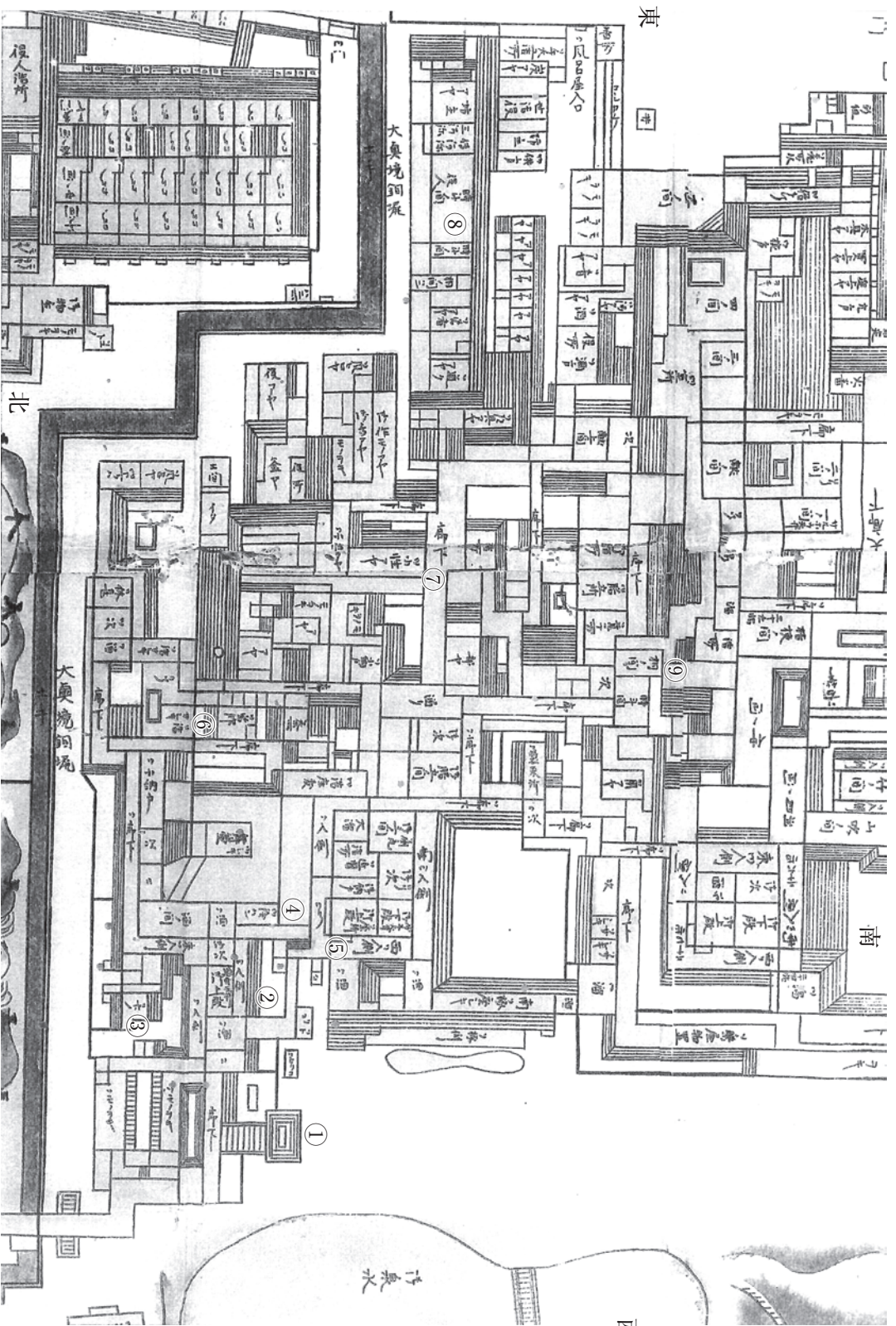


図7 「江戸城本丸絵図」の「風」部分



図8 「江戸城本丸御殿図」の「大奥」部分(二)

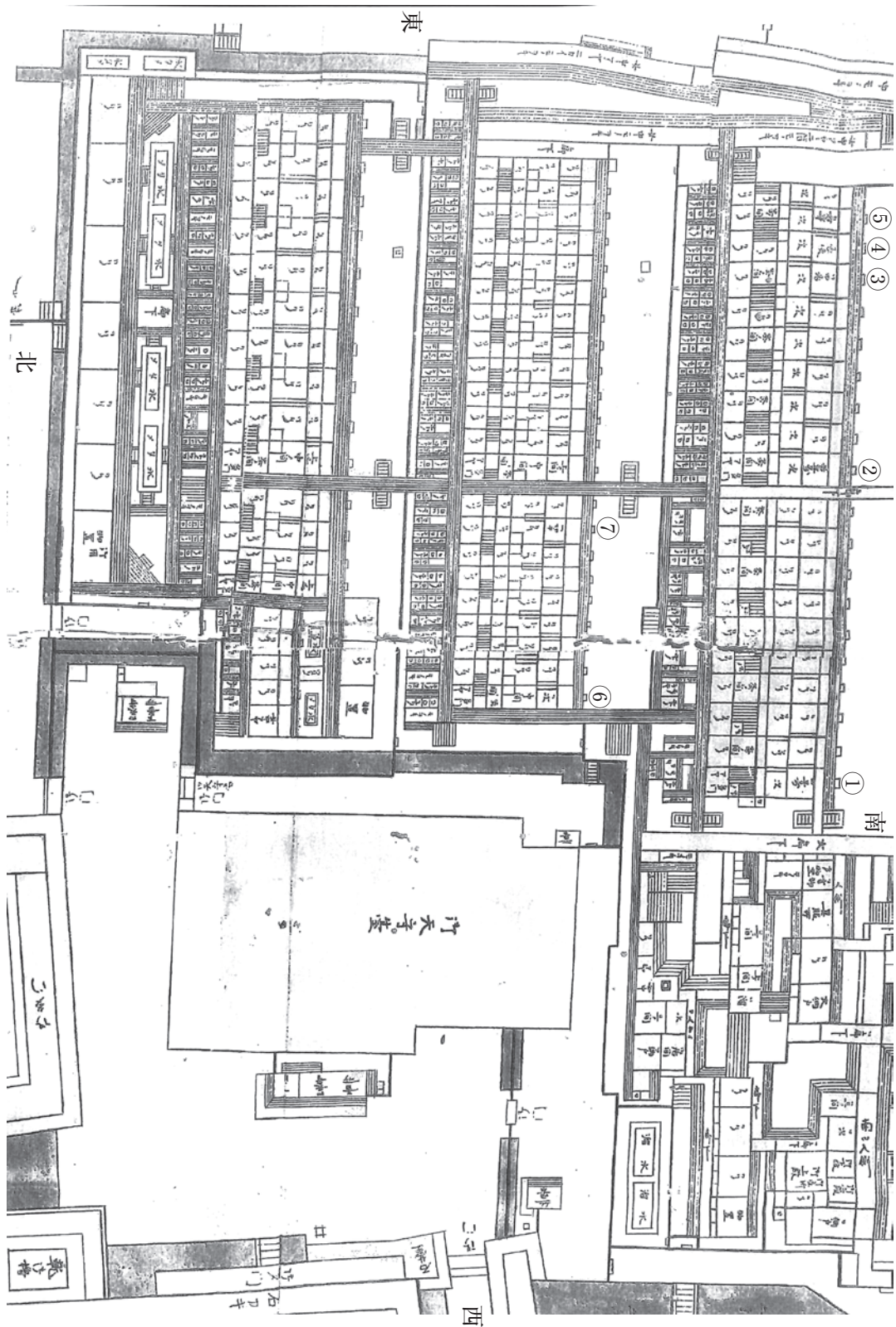


図9 「江戸城本丸絵図」の「大奥」部分(二)

